

論文

## 〈狂人〉の越境の旅

——周樹人と〈狂人〉の出会いから彼の「狂人日記」まで——

李 冬 木

〔抄 録〕

本論で述べる所の〈狂人の越境の旅〉とは、周樹人が留学期に〈狂人〉と出会ってから彼が「狂人日記」を創作し、それによって〈魯迅〉となった精神的過程の側面であり、前論で完成した〈狂人精神史〉という背景を基礎にし、「摩羅詩力説」から「狂人日記」の間の叙述の空白に対する補述である。筆者が考えるに、この両者の間には、まだ有機的に関連した説明は乏しく、文芸作品の翻訳と批評が組み立てたものと周樹人が伴っていた〈狂人の越境の旅〉は、ちょうど両者の間の精神的な繋がりを成している。本論では周樹人がこの過程で〈ゴゴリ〉と三種の「狂人日記」に出会った現場を明らかにし、ニーチェの言説の下の〈ゴリキー〉と〈アンドレーエフ〉と〈チェーホフ〉の〈インスパイア〉、〈狂人美学〉の確立過程から、〈明治のロシア文学〉の精神と創作の実践意義までを取り上げる。周樹人は翻訳を通じて、言葉の意味を超えた〈狂人〉の〈境〉の移植を実現した。「狂人日記」は〈狂人の越境〉の精神的到達点であり、37歳の周樹人がもたらした新たな一ページの始まりでもある。

キーワード 狂人日記、周樹人、ゴゴリ、ゴリキー、アンドレーエフ

### 一 〈ゴゴリ〉と魯迅の「狂人日記」

本論で述べる所の〈狂人の越境の旅〉は、周樹人が留学期に〈狂人〉と出会ってから彼が「狂人日記」を創作し、それによって〈魯迅〉となった精神的過程の側面である。既刊の拙文からもわかるが、この過程においては、終始〈狂人〉の言説によって構成された〈狂人精神史〉が付き従っていた<sup>(1)</sup>。本論ではこの前提の下で、既に初歩的な検討を行った「文芸創作と批評の中の〈狂人〉」<sup>(2)</sup>問題について更に一步踏み込んだ掘り起しと展開を行い、文芸における〈狂人〉が周樹人の文芸観、審美傾向と文芸実践活動に与える影響を、そこから、文芸メカニズム上の「狂人日記」への精神軌跡を明らかにしている。

魯迅の「狂人日記」の検討にとっては、〈ゴーゴリ〉は恰もパラドックス的な存在のようなもので、同名の二作品の関連性が明示されている一方、魯迅の「狂人日記」を説明するには足りない。魯迅は、自分の「狂人日記」は「表現の深刻と形式の特異」が認められたため、一部の青年読者の心をかなり激しくゆさぶった。しかしながら、この衝撃は、従来、ヨーロッパの大陸文学の紹介を怠ったせいであった」と言う。これにより彼は「ヨーロッパの大陸文学」という糸口の下、自己の創作と1834年のゴーゴリの「狂人日記」と1883年のニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』の関連を明示した。しかし彼は同時にゴーゴリとニーチェの区別をも明らかにした。即ち「あとから現れた「狂人日記」は、家族制度と礼教の弊害との暴露を意図していて、ゴーゴリの憂憤よりも深く広がったが、むしろニーチェの超人のほうが渺茫としていた」<sup>(3)</sup>。〈区別〉を強調するところがその中のポイントであった。

周遐寿（作人、1885-1967）は身近にいる重要な関係者であり、ゴーゴリの「あの女のことでまるでふぬけた」（原語：「発花呆」）主人公と魯迅の迫害狂の〈狂人〉のイメージとは趣きが異なることを指摘した<sup>(4)</sup>。竹内実（1923-2013）は嘗て二葉亭四迷の日本語訳の「狂人日記」と魯迅のそれを比較して、両者に極めて大きな相違があることを発見し、甚だしい場合、「外見上は似ている」或いは「構造上一致している」ところさえも微妙に異なるところがあるとした<sup>(5)</sup>。チェコスロバキアの学者〈馬里安・高利克〉（Marián Gálik, 1933-）は三十年前にこう断言している。「魯迅の言い方と一部の学者の努力はいずれも未だ我々を信じさせることに成功できておらず、この表題を除いて、ゴーゴリはまだ魯迅に更に多くの物を与えている。なぜなら彼らの主人公及び作品の内容と形式は全て非常に異なっている」<sup>(6)</sup>。このような言い方は少し極端さを免れないが、両者を読み比べて実際に感じたこととも合致する。確かに、二つの「狂人日記」は作品名が同じであることと日記スタイルの形式及び始まりと終わりの描写が酷似していること以外に、主人公に内在する精神面で相通じる所を見出すことはできない。そうであるにしても、もしある論文の言い方を借りれば、こうなるであろう。「魯迅の創作の発生をゴーゴリあるいは中露との間のある一つの手がかりに限定することはできないが」、この二つの「同題小説」を「比較・対照的に分析すること」は、今なお多くの論文の「避けられない筋道となっている」<sup>(7)</sup>。しかし、魯迅の「狂人日記」についての成立要因を言えば、この道筋の有効性は早くも疑われた。そこで魯迅の〈狂人〉精神と通じる人物を探すことも自然と項目に選ばれ、〈ゴーゴリ〉〈ニーチェ〉を継いだ後、また〈アンドレーエフ〉〈ガルシン〉乃至多くの作家の作品と「狂人日記」との関係の考察が出てきた<sup>(8)</sup>。これらの考察は既に定型化した「避けられない筋道」に対して、疑いもなく開放性の意義を有している。しかし同時にそれらの大多数が「平行比較」が作り出す生産物であるからして、その時の周樹人とは事実関係においても文章の階層においても、いずれにおいても大きな距離が有る。即ち、周樹人が当時現場で目にしたのがどのような〈狂人〉であったかを明らかにすることはできなかった。

1966年九月、北京魯迅博物館は意外にも「魯迅留日時期の二冊の日本式装丁のスクラップ」

を入手し、後に、『小説訳叢』と名付けた<sup>(9)</sup>。『小説訳叢』には、三篇の〈ゴゴリ〉の作品がスクラップされており、「狂人日記」も含まれていた<sup>(10)</sup>。これは、周樹人が当時〈ゴゴリ〉及び〈狂人〉と出会っていた確実な証拠であり、彼とゴゴリとの終生の結縁の始まりであった——晩年「死せる魂」を訳し、「死せる魂百図」<sup>(11)</sup>を自費出版したのは、無論後日談であるが、彼が若いころゴゴリと出会った一つの総括である。明治期を通して、ゴゴリの作品で日本語に訳されたものは多くなかった。明治二十六（1893）年から四十四（1911）年までの十八年間でわずか十七篇にすぎなかった<sup>(12)</sup>。周樹人は1906年5月から1907年5月の一年で、集中的に三篇を収蔵したことは、ゴゴリに大いに傾倒していたと言わざるを得ない。

それでは、彼のゴゴリに関する知識はどこから来るのだろうか？

## 二 〈ゴゴリ〉に関する紹介と評論

作品以外に、先ず考え得ることはゴゴリに関する評論である。ゴゴリが日本で最も早く翻訳されたのは、上田敏（1847-1916）が英文から訳したもので、明治二十六（1893）年一月「第一高等中学校校友会雑誌」の「ウクライン五月の夜」であった<sup>(13)</sup>。同年ある人が「非凡非常なる露国文学」と評論した時、その重点はプーシキンを評することにあり、「詩伯ゴゴリ」の言葉を借り、「プーシキンは非凡非常の顕象」であるとあった<sup>(14)</sup>。明治二十九（1896）年十一月、西海枝静（1869-1939）が初めて詳細に「ロシアの文豪ゴゴリの傑作レウヰヰル、その創作の特異点及び彼がゴゴリの墓地を訪れる情景」<sup>(15)</sup>を紹介している。一年後彼はまたゴゴリの「死人」及び文学の特性を詳細に紹介し、「暴露直言を惜らず流石嘲笑詩人の腕前ありて読者をして抱腹失笑しながら知らず識らず篇中の人物を厭ふの会を生ぜしむ」<sup>(16)</sup>と。これ以外に、ゴゴリに関する評論はあまり見られない。例えば、上田敏がゴゴリを翻訳したのと同時期に、桑原謙藏（生没年不詳）も「露西亞最近文学の評論」という題の長文を発表し、その趣旨は「最近五十年のロシアで出現した小説と文学者」であり、『早稲田文學』上で五回にわたり連載するも、ゴゴリの名前は挙げていなかった<sup>(17)</sup>。

しかし昇曙夢（1878-1958）の登場により状況は一変した。昇曙夢は日本の「明治三十八、九年以降のロシア文学勃興期に文壇に登場した」翻訳家と、歴史学者に評された<sup>(18)</sup>。しかし、もし評論紹介の観点から見れば、彼の登壇はひょっとしたら少し早かったかも知れない。それは彼が明治三十七（1904）年六月に既に「露国文豪ゴゴリ」<sup>(19)</sup>を出版していたためである。これは日本初のゴゴリに関する専著で、時代を画した作品でもある。「緒論」と「結論」を含め、18章の内容から構成され、ゴゴリの一生、創作と思想及び社会環境について全面的な紹介がなされている。その中の四、五、六、七、十一章は専らゴゴリの創作と社会の影響を紹介し、ゴゴリの主要な作品や、後によく引用されるゴゴリの多くの創作に関係する素材を提供した。例えば「検察官」が上演され、公衆の不满を引き起こしたが、皇帝が命令を下し庇

護を与えたこと等がある。付言すると、その後、魯迅が「暴君の臣民」を書いた時に、このゴーゴリの例に言及している。「外国の例を一つあげるなら、小事件ではGogolの戯曲『検察官』がある。人はみなこれを禁止したが、ロシア皇帝は逆にその上演を許可した」<sup>(20)</sup>。昇曙夢のゴーゴリの評伝は、既に同時期の一言片句と個別の篇目の紹介を遥かに超え、圧倒的に内容が充実していた。ゴーゴリの作品中五篇が日本語に翻訳された時代であり<sup>(21)</sup>、この一点で更に得難く貴い。

本論と関連する意味では、昇曙夢のこの「露国文豪ゴーゴリ」には注意せざるを得ない点が三つある。第一に、作者の立言は、ロシア文学が紹介された時の本末転倒な不公平さを正すことにあり、これによりゴーゴリに対し、明確な文学の定位を与え、彼はプーシキンと同じようにロシア文学の「黄金時代」を代表し、最近のロシア文学の源泉であり、前提であり、基礎と巧妙の所在であるとした。「最近露西亜文学の源泉たり、前提たり、基礎たり、光明たる所」<sup>(22)</sup>である。十九世紀以来ロシア文学発展史の背景のもと、「彼は其前代の文学と最近文学との過渡期に在りて」<sup>(23)</sup>、その代表する方向は「国民性の表現者」と「写実主義」であった<sup>(24)</sup>。

次は〈ゴーゴリ〉に関するイメージを作ったことである。「此の書に於て吾人が意を用いし所は専らゴーゴリ文学の根底と、彼が内心の生活とにあり。是れ吾人が其創作的生活と共に崢嶸たる天才の主観的歴史を叙して一面、現代思潮の神髓に触るゝ所あらんを期したればなり」。ここで言う所の「天才」「内心の生活」「現代思潮の神髓」は、昇曙夢のゴーゴリ観を代表しているが、しかし彼はゴーゴリの「天才」のイメージを塑像するのと同時に、この「天才」が世間には許容されず、迫害を受けている側面を強調した。彼は人々が彼のこの書籍を通じ「近世露西亜文学が其発途に於て如何なる天才の犠牲を償せしかを窺い知」ることができることを希望した<sup>(25)</sup>。

第三に、「外套」と「狂人日記」に関する紹介である。この両篇の作品は、二人の主人公は似通っており、「ペテルブルグに於ける中等社の生活に一面を写し」ていた。最も「狂人日記」を詳細に紹介しており、それを評して、「吾人は此作を読む毎に未だ曾て著者が狂人の感性と其病的状態を描く筆の深刻痛快なるに驚かずんば非ざるなり」、「ゴーゴリは主に人生の暗面を指摘し、好笑するを以て任じたる文学者の一人として、以上の作物に於ても単に個人を写すに止まらず、それと同時に彼が当時露国の官海に於て認めたる暗黒の半面を指摘し、嘲笑して社会的自覚を促さんとしたるなり」とした<sup>(26)</sup>。

以上の三点はいずれも周樹人と関係がある。周樹人の「狂人日記」と〈ゴーゴリ〉に関する知識は、必ずしもこの書物から来ている訳ではないが、この書物或いは昇曙夢の当時の紹介との関りを脱することはできない。一年後の明治三十八（1905）年八月、昇曙夢が雑誌『太陽』で再び長文の「露文学の過去」を発表し、十世紀からゴーゴリのロシア文学の「過去」を紹介したが、その実それはゴーゴリ評伝の文学前史であった。この長篇の最後は、彼の以前の著作「露国文豪ゴーゴリ」中の〈ゴーゴリ〉に関する結論と完全に附合している。ゴーゴリが始め

た「写実道路」を強調した。「晩近に至りトルストイの如き大家現はれ、ゴーリキイ、チェーホフの如き天才輩出せしと雖も遂に此の写実主義の道程以外に出づる能わざりしなり」と<sup>(27)</sup>。立て続けに、昇曙夢のこの長文を発表した雑誌『太陽』の〈評論の評論〉欄に「露国文学の写実主義」が掲載され、「クロボトキン氏の近著『露西亜文学』中に、面白き議論ある」ことを紹介し、さらに「文学中に、社会的分子を入れ、露国内部の状態を分析解剖して批評したる社会観を加味したるは、ゴートルを以つて嚆矢とす」と述べている<sup>(28)</sup>。北岡正子の調査によって、クロボトキンの「ロシア文学の理想と現実」も、周作人が「摩羅詩力説」を書いた材料の一つであることがわかったが<sup>(29)</sup>、これについては、後述する。

昇曙夢は明治四十(1907)年十二月、312頁にわたる二冊目の「露西亜文学研究」<sup>(30)</sup>を出版し、明治四十一年四月さらに「露西亜の自然主義」<sup>(31)</sup>を発表、再び以前紹介したゴートルを当時まさに討論されていた「自然主義哲学」という言葉の中に収め入れ再議論させた。明治四十二(1909)年の四月から五月の間、ゴートル生誕百年の記念の際に、「東京毎日新聞」で六回の「近代露文学の暁星」を連載した外、雑誌『太陽』で論文を発表し、「露国写実主義の創始者」の題でゴートルの地位を定め、また、『検察官』と『死せる人々』の二著を例に挙げて、日本の自然主義文学者の注意を喚起した。「その材料は直接実生活の経験から来たものでもなければ、実社会に対する厳密な観察から来たものでもない。……全然彼自身の天才で生み出した作物である」といい、「想像力」の働きを強調し、「我邦の自然派などは客観的描写と云ふことを標榜し、ありのまゝ主義に始終して居らる々」とは「余程趣きが違っている」と述べている<sup>(32)</sup>。

これ以外に、昇曙夢がロシア文学を紹介した文章は多く、もしその他の人のものを加えると更に多くなるが、〈ゴートル〉に関することだけで言えば、評論に見えるところによると、ほとんど上述の範囲を出ない。昇曙夢は〈ゴートル〉の知識の主要な提供者ということができであろう。まさにこのような背景の下、周樹人はゴートルに関心を抱き、その作品を収集しはじめた。先に触れた『小説叢書』にスクラップされた「狂人日記」「昔の人」「外套」の三篇が同じ時期に集められたのは決して偶然ではない。周樹人は二葉亭四迷のゴートルの翻訳を重視していたが、その早期に翻訳されたゴートルの中篇「肖像画」<sup>(33)</sup>を収蔵していなかった(或いは集めていなかった)ことも証拠の一つである。

### 三 二葉亭四迷以前の二種類の「狂人日記」

實際上、二葉亭四迷の名の下の「狂人日記」は、日本におけるゴートルの同名の作品の初めての翻訳ではなく、二番目の翻訳である。初めての翻訳は明治三十二年(1899)のもので、雑誌『天地人』三月号に掲載された。翻訳者は〈今野愚公〉と署名があり、「狂人日記」の表題の前には「風刺小説」の四文字があり、表題の下には「露人ゴートル作」と原作者名があった。三月号から六月号にかけて、四期連載された。後に研究者が前後八年の差がある二種の日本語訳



を対照すると、今野愚公の翻訳に比べ、二葉亭四迷の翻訳は更にその精神を伝えており<sup>(34)</sup>、前者の誤訳を訂正しているだけでなく、文調にも細かな注意が払われており、前者の濃厚な「漢文調」とは異なり、徹底的な俗語化を行っていた<sup>(35)</sup>。今野愚公の日本語訳「狂人日記」は必ずしも周樹人と直接関係しているわけではないが、その時代の創作風土に対する影響は無視できないものであり、〈狂人〉のイメージが登場する背景として考えられる。所謂〈狂人の越境〉とは、これが初めての宿駅である。ゴーゴリの〈狂人〉が日本に上陸した。

以前、筆者は松原二十三階堂の「狂人日記」が1902年に出現したことについて不思議に感じていた。彼がこの小説を書いたことは、彼が兄と思う二葉亭四迷が関係しているのではないかと推測していたが、目下は、松原二十三階堂の同名の創作は文体上今野愚公の翻訳と近いものがあり、両者はともに戯作の風格があると考えている。

松原二十三階堂、本名松原岩五郎（1866-1935）、別号乾坤一布衣、明治時代の下層に注目した作家、新聞記者である。明治二十三（1890）年、文壇に登場し、その『『長者鑑』が「社会の罪」を描いた作品として好評を博した<sup>(36)</sup>。同じ時期二葉亭四迷と交わりを結び、彼に「何が今別種の天地が眼前に開けたもの、如く」感じさせた<sup>(37)</sup>。後者の影響の下、社会問題を注視し始め、共に底辺社会に深く入り調査を展開した。明治二十五（1892）年「国民新聞」の記者となり、新聞紙上で様々な貧しい人々の調査報告を連載し、翌年一月には、民友社から『最暗黒之東京』を出版した。当該作品は明治時代のルポルタージュの代表作であり、明治二十年代の産業社会の暗黒面を暴露し、その影響は大きく、五度版を重ねた。「三十年代に文学の新傾向を準備するもの」と評された<sup>(38)</sup>。

松原二十三階堂は明治三十年代文学の新傾向に対する影響を、先ず自己の創作上に体現した。これは彼が明治三十五（1902）年三月に発表した短篇小説「狂人日記」である<sup>(39)</sup>。この小説は、ルポルタージュの『最暗黒之東京』の後に続く、同一のイメージ下の文学創作であり、「暗黒」暴露の広さでも深さでも、前者の芸術的なアップグレード版と言える。

主人公の名は〈在原〉と言い、貿易会社に勤務するサラリーマンであるが、〈誇大妄想狂〉であった。この人物の社会的地位と性格の設定は、ゴーゴリの「狂人日記」の九等文官の〈ポプリシチン〉<sup>(40)</sup>と酷似している。小説は〈抜粋〉による主人公の3月3日から7月10日の中の10日間の日記で構成されている。初め、周囲は「小物と俗物」で満たされ、それらに見識もないことを恨んでおり、〈予〉には天下を経綸する大手腕と陰陽を治める大技量があり、知らないことはないと考えていた。〈予〉は経済界の貿易計画を援助するも、却って冷笑や皮肉に見舞われた……。このようにして、主人公の「絶対無比の天才」的意識と「天下を独歩する」傑物意識は、彼が処されている現実と先鋭な衝突を引き起こした。彼は雨漏りがしても修繕ができない貸家に住み、家賃や仕立屋の金を滞納しあちこちで借金取りを避けているにもかかわらず、〈新開地〉の北海道や台湾に行ったり、大貿易で巨利を手にしたたり、置田万頃の大地主になったりすることを想像していた。そんな彼の思いのうちに、それまで怖かった社長や役員などを

ことごとく見下すようになり、同時に日頃のケチくささから一転して、会社の小使のために一度に十人前の鰻重を注文し、相手を啞然とさせた。彼は某局長に自分を役人するように差配し、最低でも〈書記官〉になれると考えた。「嗚呼、書記官は実は一県内の県政を総理すべき重大官職であり」、他人はどうか知らないが、自分は〈未来の総理大臣〉である！小説はこのような〈狂人〉の目を通して様々な世相を描写している。彼は前後幾度も、総理大臣の官邸、富豪の豪邸や鉦山の所有者の別荘に進入、潜入、忍び込み、そこでの豪奢で淫らな行い、贅沢三昧の生活、大臣、評議員、社長の汚い交易を目の当たりにした。彼は招待された宴会で上流社会の俗物化した人物と知り合った。様々な食器、盆栽、書画、刀剣と古い仏像を所蔵し、金歯、金の懐中時計に金の鎖、金縁眼鏡と至る所金色に輝き、更に金持ちにこき使われる車夫と主人より威張っている下男がいた。別の方面には、崩れそうなあばら屋の貧民と巡査が捕まえた物乞いとそれを見物する人々がいた。最も興味深いのは、彼が神戸に向かう列車の一等車で一人の老紳士が二人の年頃の娘と千金の価値がある鳥かごと鳥を抱えているのを目撃し、一人の年若い紳士が懸命に彼に〈道德会〉に加入し会に賛助するように勧めたことである。小説の最後は鉦山を所有する大富豪の妾の裏庭の場面で終わっている。三名の〈医学士〉が車を飛ばしてやって来たが、妾が病気になったからではなく、一匹の子猫が「黄金の頸環を箝たる儘緞子の菌の上に横臥して氣息淹々たりしは頗る滑稽の見物なりし」からである。これは自己膨張の〈狂人〉を通じて現れてきた明治三十年代半ばに社会が膨張期に入った縮図であった。

松原二十三階堂は明治二十五年新聞紙上にドストエフスキイの『罪と罰』を翻訳せよと訴えた<sup>(41)</sup>。これにより彼は早くからロシア文学に注目しはじめていたことがわかる。彼と二葉亭四迷には非常に密接な師弟関係があったが、後者が『狂人日記』を翻訳したのはその五年後で、その上既に二葉亭四迷は筆をおいてずいぶん経っており、まさに「文学嫌悪は、この時期に頂点に達し」<sup>(42)</sup>、加えて不在であること——同年五月に中国ハルビンへ出発していること<sup>(43)</sup>から、二葉亭四迷よりも、松原二十三階堂の「狂人日記」のほうが、三年前に登場した今野愚公の「狂人日記」に距離的に近いのではないかと思われる。主人公の社会的地位や性格設定、諧謔滑稽な筆使いはもとより、今野と松原の文章が現わしている〈類似性〉もこの点を証明することができる。これにより、もし今野の翻訳がロシアの〈狂人〉の日本上陸を意味しているなら、松原の創作は、この「狂人日記」という作品の形式を借りて、日本の物語を述べ、主人公の〈狂人〉をして「日本風」に本土化したと言える。後者は社会問題小説に属するといえるが、〈狂人〉が日本の明治文学に主人公として正式に登場するという先駆を開いた。これは〈狂人の越境〉の第二〈宿駅〉、即ち日本への本土化ということができる。

松原がこの作品を発表した一か月後、周樹人一行が上海から〈神戸丸〉に乗って横浜に到着した。彼は当時この作品に関心があったかは知る由もない。このことからわかるように、彼にはゴーゴリ関心があったが、その資料が見つかるのは、1906年に彼が仙台医学専門学校を退学して東京に戻り、彼が言うところの〈文芸運動〉に従事した後のことである。しかしこれは、

後から調べていく過程では、彼がこの作品に出会った可能性がなかったということの意味はない。当該作品が発表された『文芸倶楽部』誌は、彼の文学的関心の対象であり、重要な材源だからである。前に紹介した『小説叢書』十篇の小説のうち、二篇は『文芸倶楽部』から切り取ったものである<sup>(44)</sup>。しかしさらに重要なのは、松原がこの作品の前につけた小序かもしれない。

一日郊外散歩の折、原上樹蔭の下にて此の日記を得たり。表紙はクロス仕立てにして枚数百余頁を綴りたるものなり。文章不羈縦横にして逸気奔騰、慷慨淋漓の所素より常識家の筆にあらず、依て中間数章を抜萃して假りに狂人日記と名く<sup>(45)</sup>。

この種の〈偶然〉に日記を得て、それを読者に見せるという書き方は、後の魯迅の「狂人日記」と似てはいないだろうか。まさか偶然なのであろうか。

#### 四 〈ゴゴリ〉から〈ゴリキー〉へ

では、上述した明治三十年代の〈ゴゴリ〉と二種類の「狂人日記」は、周樹人にとってどのような意味があるのであろうか。

先ず、篇名と「狂人」も「日記」を書けるというこの文学形式の例示意義はいうまでもなく、まして文芸運動に身を投じようとしている周樹人は、やはり悟性の高い人物であることは猶更である。次に、彼はこの段階において相当程度、欧州とロシア更に日本文学に関する知識を有しており、ゴゴリを含む多くの作家や詩人に注目しはじめたが、しかし、彼の当時の文学的嗜好と自己構築に選ばれてきた精神的素材から言えば、「ゴゴリの写実主義」や「狂人日記」と類似した風刺作品はまだ彼の関心の対象ではなかった。彼が注目していたのは、それら個性を称揚したロマン主義の詩人であった。例えば、彼が当時もっとも力を入れ、最も彼自身の文学観を体現することができる「摩羅詩力説」の中で、彼は八人の詩人で構成された〈悪魔派〉詩人の系譜を打ち建て、その系譜はイギリスのバイロンから、ロシア、ポーランド、ハンガリーに及び、シェリー、プーシキン、レールモントフ、ミツキエヴィチ、スウォヴァツキ、クラシンスキ、ペテフィが次々に登場し、「あらゆる詩人のうち、反抗を決して行動を起こし、かくて世人に疎まれたもの全てをここに含め」<sup>(46)</sup>たと、壮観を呈した。しかし〈プーシキン〉〈レールモントフ〉と同時代の〈ゴゴリ〉についてはその中に項目を作っていない。

スラヴ民族は、その思想が西ヨーロッパとはまるで違っている。だが、パイロンの詩は、ここにとどまるところなく勢いよく入ってきた。ロシアは一九世紀初頭になってはじめて文学が改新され、次第に独立に向かい、日ましに発展していった。今では先覚諸国と轡を並べて走る観があり、西ヨーロッパの人々はそのすばらしさに驚かぬ者としてない。その先駆を公平に考えてみれば、実に次の三人に負うのである。プーシキン、レールモントフ、ゴゴリ。前二者は詩によって世に聞こえ、等しくパイロンの影響を受けている。ただゴゴリは社会人生の暗黒面の描写によって著名であるが、前二者とは趣を異にしているの



で、ここでは触れない<sup>(47)</sup>。

上文から分かることだが、ゴーゴリは「趣を異にしている」ことにより、項目を立てず、意識的に「捨象」された。北岡正子の考証によれば、「摩羅詩力説」の「プーシキン（普式庚）」は、その材料の主要なものは八杉貞利の『詩宗プーシキン』から来ており<sup>(48)</sup>、レー尔蒙トフ（来爾孟多夫）は主にクロボトキンの『ロシア文学（理想と現実）』<sup>(49)</sup>に依拠し、昇曙夢の「レー尔蒙トフの遺墨」<sup>(50)</sup>と「露西亜文学研究」<sup>(51)</sup>によって補充された<sup>(52)</sup>。前に提示したが、雑誌『太陽』上で「露国文学の写実主義」を発表し、主に「クロボトキンが彼の近著「ロシア文学」の中での観点を紹介し、その重点は〈ゴーゴリ〉であった。しかし周樹人はこの本を手に入れた後、その中の〈レー尔蒙トフ〉を選び自分の素材としただけであった。昇曙夢の「露国文豪ゴーゴリ」は周樹人がゴーゴリに注目した主要な知識の来源であるはずだが、彼は「摩羅詩力説」の中で、その「ゴーゴリのみは社会と人生の暗黒を描写して著名である」以外、ほとんどこの方面の知識を運用せず、昇曙夢が提供した〈レー尔蒙トフ〉の材料を選択した。〈ゴーゴリ〉を捨てたのは、周樹人の見方では八人の摩羅詩人と趣味が異なっていたからである。言葉を変えて言えば、ゴーゴリのように「社会と人生の暗黒を描写」する文学はバイロン式を崇拜する反抗的な彼にとっては、やはりこの後の課題であった。しかし逆に言えば、このときからゴーゴリは彼のその後の文学の契機になったのかもしれない。

では、上述の「狂人日記」を除き、同時期の〈狂〉に関わる作品の中に、後の魯迅の「狂人日記」の文体や様相が似通っている創作はあるのであろうか。ある、が答えである。それは雑誌『趣味』に「狂人日記」が掲載されたのと同時に、雑誌『新小説』に掲載された二葉亭四迷の別の翻訳作品の「二狂人」である。この作品が久しく歴史の塵芥の下に埋もれていたことにより、魯迅の「狂人日記」が発表された百年後に至ってはじめて、新たに発見されたが<sup>(53)</sup>、ここでそのあらましを述べることにする。

「二狂人」の原作はゴーリキーの「誤解」（ОШИБКА、1895年）であり、〈二葉亭主人〉によりロシア語から翻訳された。同一訳者の手になる歴史に名を留める「狂人日記」と比べてみると、「二狂人」はその後ほとんど世に知られず、日本近代文学全般の事柄を網羅した優れた巨大な〈事典〉<sup>(54)</sup>の中にもその痕跡を探し出すことはできない。岩波書店出版の『二葉亭四迷全集』の「解説」でさえも当該作品はどこが原作かを誤っており、「昔気質の地主たち」の部分翻訳と指摘しており<sup>(55)</sup>、人々にゴーゴリの作品と誤解させる。しかし後の物悲しさとは対照的に、「二狂人」は当時、華々しく登場したのであった。明治四十（1907）年三月一日、『新小説』に当該作品が掲載された「第十二年第三卷三月号」には特別に〈二狂人〉の口絵があっただけでなく<sup>(56)</sup>、さらに「ゴーリキイの人生観真髓」と題し、昇曙夢が訳した86条のゴーリキーの語録が付けられていた<sup>(57)</sup>。既に紹介したが、同月、雑誌『趣味』で「狂人日記」の連載が始まった。翌年出版された二葉亭の翻訳作品集には、四篇の作品が収録され、「二狂人」は含まれていなかった<sup>(58)</sup>、「狂人日記」は収録されなかった。このことは当時の人々が前者を重視していたことを

物語っている。

統計局で統計員をしていた〈キリール・イワーノヴィッチ・ヤロスラーフツェフ〉は思想を伴とした人間であった。彼は思想形態を捉えることができず、思想の束縛を抜け出すこともできず、最初頑強に思想と闘争したが、後には思想に自分を任せた。彼が同僚に頼まれて、別の精神病を患った同僚の世話をしに行った時に変化が起こった。気を病んだ同僚が〈クラフツォフ〉と叫び、病状としては訳のわからないことを、時には出鱈目を、時には至極理にかなったことを滔々と言いつける。小説の前半部は〈ヤロスラーフツェフ〉自身の思想闘争が書かれており、後半部分は彼が気のふれた同僚の〈クラフツォフ〉を世話した一夜の二人の「思想交流」が書かれている。最後には世話をした者が世話をされていた者の主張を認め、彼は気がふれていない一人の正常な人間だと考えるようになった。翌朝、精神病院の医師が患者の所に来た時、付き添っていた者が阻止し、この人は正常です、あなた方は彼を精神病院に連れていくべきではない、と言った。その結果付き添っていた人間も気がふれたと見なされ、一緒に連れていかれてしまった。作品の最後は、二人が病院にいる場面で、先生の方は良くなっているが、弟子の方は駄目で、「運動の時、病院の庭で二人は顔は合せる。クラフツォフの一髭の黒い、毎も亢奮した顔が見えると、ヤロスラーフツェフは遠方から小走りに駆け出して側に行き、帽子を脱りながら、そつと小声で、「先生、お話して下さい！」<sup>(59)</sup>、と言った。

明らかに、この作品中の狂人はゴーゴリの狂人より人々をおののかせた。況や狂人が二人もいるとは。それ故、『帝國文學』は瞬間にこの二篇の作品について〈無極〉と署名した評論を發表したが、その題目は「狂人論」であった<sup>(60)</sup>。

頃者我文壇は二葉亭主人の靈妙なる訳筆によりて新たに露西亜種の三狂人を得た。ゴースキイの「二狂人」及びゴーゴリの「狂人日記」の主人公である。「二狂人」は物凄い心理解剖で、あの口繪を熟視して後、燈を細めて、風黒い窓外を眺めると、何だか庭の樹間に物があって蠢動し声があつて囁く様である。クラフツォフは仰いで天を指し、ヤロスラーフツェフは其足下に蹲踞している。その中に二人は立上がつて気味の悪い碧眼を光らし、のそゝと此方へ歩み寄つて、窓から覗き込みそうな様子だ。此に至つて自分は第三狂人になりはすまいかと心配したが幸にも「亀の子が囊を被つて歩いているような九等官の先生が出て来て此役を勤めて呉れたので安心した。……

「二狂人」の主人公の精神的特徴、思想変遷及びその原因を紹介した後、評論者の無極は「狂人日記」を以つて以下のように対比した。

「狂人日記」は二狂人の様に物凄い、深刻の物ではない。蓋し「二狂人」の凄いのはその狂気になる過程を精写したのにある。読者は始めの中其主人公を自分と同等な真人間と考え、其煩悶をも多少自分と引き較べて同情もし、是認もする。然るにこの同類の一人が漸々狂おしくなつて来て、終には全然理性を失ひ、悟性大混乱を來たして、最早人類たる資格を失ひ、動物に退化して仕舞うのを眼のあたり見るのであるから、一種凄愴な感に撲れざる

を得ないのである。恰も眼前に一人ありて、其者が眉を顰め、唇を咬み、髪を掻き切り、悶えるのを救いもえせず見まもると、見るゝ眼は怪しい色に光り、尾が生へ、尾が生じ、一声悲鳴して身を翻せば、早くも四足の怪獣となって行衛も知らず、狂奔する、其行衛を見送るようなものである。死よりも恐ろしい最後を思って誰でも戦慄せずには居られない。然るに「狂人日記」の主人公になると、初めから最早立派な狂人なので、読者は全く客観的態度を執ることが出来る。詩的假象界の人物として鑑賞することを得る譯だ。若し詩の対象として考えると狂人には一種の妙味がある。

〈戦慄〉と〈妙趣〉はこの二篇が当時残した異なった感想である。つまり狂者の〈意識の流れ〉の形態と不断に発展演繹することから言えば、明らかに「二狂人」と後の魯迅の「狂人日記」は近づいている。それらの出鱈目に見える話に加え、細かい精神披露と徹底した論理展開の文明批判のスタイルが、研究者をして二つの文章を対比研究させる。もし先に結論を述べるなら、比較すればするほど両者の極めて多大な類似性を感じるであろう。ここに〈ゴリキー〉の問題が生じる。具体的に言えば、留学期の周樹人と彼の身近な〈ゴリキー〉は一体どのような関係であったのであろうか。

## 五 周樹人の身近な〈ゴリキー〉と〈ニーチェ〉

周作人が当時「ゴリキーは既に有名で、『母親』も様々な訳本が出ていたが、豫才は注意していたかった」<sup>(61)</sup>と述べた後から、〈ゴリキー〉は長期にわたり留学生周樹人の周辺から消えてしまったが、ある学者が魯迅の蔵書研究をする中で早年の蔵書の中にゴリキー小説集が六冊あるのを指摘して、周作人がもたらした認識の偏りを正すことになり、〈豫才〉が当時実はゴリキーの作品に「目を通し」、比較的深い印象を持っていたことに人々の注意を向けさせた<sup>(62)</sup>。しかしこの学者が同時に述べた〈ゴリキー〉は「魯迅の思想上の強大な共鳴」を引き起こしていなかったというのは、「主にゴリキーが人物の思想と精神に対する解剖と表現方法は、当時の魯迅が人生の模索に対する軌跡と比較的大きい距離があったからである」<sup>(63)</sup>という見方は、独断を免れない。

ここでしばらく、先ほど指摘した「二狂人」と魯迅の「狂人日記」との「人物の思想と精神に対する解剖と表現方法」における極めて大きな類似性について討論することをせず、ただ〈ゴリキー〉が当時どのように登場し、何によって登場したかについて論じれば、彼と「当時の魯迅が人生の模索に対する軌跡」が遠くにあったのではなく、近くにあったことに気づくことができるであろう。

ゴゴリと比べてみると、ゴリキーが日本に登場したのはかなり遅く、まるまる九年遅れている。しかしその作品の翻訳数と普及力は前者を大きく超えている。明治三十五(1902)年三月から明治四十五(1912)年十月までは、明治期の最後の十年間で(ちょうど周樹人の留学

期と重なっている）、日本で〈ゴリキーム〉が出現した時期であり、合計八十四作品が翻訳され、六作品が収録された短篇集も一冊出版されている<sup>(64)</sup>。これは先に触れた十八年間で僅か二十作品が登場したゴゴリと比べると、対照的である。ではゴリキームはなぜこのように熱狂的に読まれ、このような高い登場率を有したのであろうか。当時の重要な紹介者の一人、昇曙夢の見解によると、これは同じ頃に起こった〈ニーチェブーム〉と直接関係があり、人々はニーチェを文学界まで追って来て、ゴリキームを文学世界の〈ニーチェ〉と見なして読んだ。

ゴリキームの名が我が文壇に始めて紹介されたのは明治三十四五年頃で、その頃から既に彼の作品がほつゝ紹介されている。明治三十四、五年といえは西紀一九〇一、二年に相当し、恰度ゴリキームの文名がロシア本国で頂点に達して、更に外国にまで轟いた頃である。

当時我が文壇はロマシチズム思潮の全盛期で、その一两年前から高山樗牛・登張竹風等によつてニーチェの個人主義的思想が盛に宣傳せられ、思想界はまさに狂飈時代を現出した。そしてニーチェ主義の影響の下に個性の發揚、自我の擴充、理想への憧憬というような気持が、新しい生命を文壇に注ぎ込んで、個性の覺醒を促して止まなかった。

こういう時代にゴリキームが迎へられたのは極めて当然のことであらう。我が読書界は最初から彼をニーチェ流の超人主義の作家として受け入れたのである<sup>(65)</sup>。

これにより、「当時の我が文学青年」が、「どんな驚異と熱情とを以て」ゴリキームを読んだのかは、「今日では想像も出来ないくらいである」。ではこの〈ニーチェ流〉のゴリキームは、当時の文学青年に何をもたらしたのであろうか。

殊に当時のロマンチックな青年とゴリキームの間には、その気分、欲求に於て相通する何物かがあった。彼等はゴリキームに於て何よりも先づ偉力と勇敢と人生の美とを空想してるロマンチストを見たのである。彼の作品の中に新しい世界に対する思想的情熱が大きく波打っているのを感じたのである。彼は最切からその夢と空想と改造の叫びとを以て、退屈な散交的生活の中にその雄々しい姿を現した。それが当時の青年にひどく受けられたのであった。つまり彼らは人間として進むべき真実の人生と社会とをゴリキームに於て学ばんとしたのである。だから彼の影響はその当時から顕著であつた<sup>(66)</sup>。

以上は昇曙夢が三十年後に回顧した当時の〈ゴリキーム〉である。当然彼自身もまたゴリキームの熱心な紹介者の一人であつた。明治三十九（1906）年から四十五（1912）年まで、彼はゴリキームの三つの作品を翻訳し、ゴリキームを評論した長文五篇を執筆している。その最初のゴリキーム論は二〇頁にも及び、1906年10月に發表され、題名は「ゴリキームの傑作と其の世界観」<sup>(67)</sup>であつた。この文章は主にゴリキームの『どん底』を紹介し、この作品の内容を通して「ゴリキームの人生観の変遷」を検討している。彼は「ゴリキームの世界観は確かに変化した。個人主義とニーチェ教の代表者たり」と断言した<sup>(68)</sup>。ゴリキームを〈ニーチェ教〉の代表者と見なしたのは、上に引用した文章のなかで述べた高山樗牛（1871-1902）や登張竹

風 (1873-1955) らの「ニーチェ」がフィルターをかけたことによるものである<sup>(69)</sup>。その中の所謂「偉力と勇敢と人生の美と」等の表現は明らかに〈高山流〉の字句である<sup>(70)</sup>。周樹人が明治三十年代〈ニーチェ言説〉の精神的参加者であり、高山得牛と登張竹風の熱心な読者であり理解者であったことは知られているが、文学の分野で「個人主義とニーチェ教の代表者」であるこの〈ゴリキー〉が彼の視野の外にあるというのは、明らかに論理的ではない。〈ニーチェ〉の延長線上で〈ゴリキー〉と出会ったことが、「当時の魯迅が人生の模索に対する軌跡」に符合していたと言えるのではないだろうか。とりわけ「二狂人」は〈ニーチェ度〉が高い作品で、いたるところで、あの出鱈目で叡智のあるニーチェスタイルの言葉を読むことができる。

何處へ行つたつて、貴様達の居ない處はないや……貴様達は蠅よ、油蟲よ、蠅よ、蚤よ、塵埃よ、壁石よ！命ぜられりゃ、如何なにでも姿を変えて、何にでも成らあ、而して種々な事を調べらあ…人間が何を、如何、何の目的で考えてるつて、一々調べらあ<sup>(71)</sup>。(ルビは筆者、以下同じ)

己が野へ出て皆を呼集める。精神上では我儕は乞食だ……如何にも我儕は信仰の甲冑を線上に棄て、破れたる希望の盾を手に持つて、此世を退散するのであるから、敢て敗北したのではないとは言えん。けれども、今に見よ、有晴れ創造の力量を具えて、自信の堅甲を擲いて帰つて来るから。凡そ自信ほど堅牢な武器はないぞ！よろしいか？而して我儕は幸福を空想して、その空想を清新な美花を身に纏ふのだ。だから貴様も邪魔しないで、己に此の大功を樹てさせろ！<sup>(72)</sup>

ね、諸君！諸君はクラフツォフを如何する積だか知らんが、苟も他人の幸福を熱望する者、手を出して人を救はんとする者……苟も生活に苦しめられて、同類相噬む、哀はれな人間を深く愍れんで熱心に愛する者は、諸君の眼中では皆狂人ではあるまいか？<sup>(73)</sup>

これらの〈妄言〉は完全に斎藤信策 (野之人、1878-1909) の筆による〈狂者の教〉<sup>(74)</sup>と置き換えることができ、また「摩羅詩力説」の「悪魔とは真理を語るもの」<sup>(75)</sup>とも置き換えることができる。この言葉の〈悪魔〉とは、当然、後の魯迅の「狂人日記」の「狂人という看板」を被せられた〈私〉のあの〈妄言〉とも置き換えることができる。この同じ流れをくむ精神的気質から見れば、明治時代の〈ゴリキー〉は、「魯迅の思想上の巨大な共鳴」を引き起こした存在であり、相反するものではない。〈狂人〉を観察する中心が外見の類似から内面の類似に整理され、〈ゴリキー〉から〈ゴリキー〉に整理されると、ちょうど自我精神の構築を進めていた当時の周樹人にとっては、後者の方がより近い距離にあったことがわかる。「二狂人」は明らかに前者の「狂人日記」に覆われた周樹人と〈狂人〉が出会い関係が生じた重要な契機である。もしゴリキーの〈狂人〉が「表狂人」ならば、ゴリキーの〈狂人〉は「裏狂人」であり、彼らはともに一種の立体的な〈狂人〉のモデルを構成している。後者の〈ニーチェ度〉はまた明らかに当時の周樹人が小説の創作状況を把握し自己の審美的な選択をする一つの基準であった。彼が追い求め崇拝したものはあの「絶大な意志の力をもっている人」<sup>(76)</sup>であり、注目して



いたものはあの「しばしば傲慢不遜な人物を全篇の主人公として描いている」<sup>(77)</sup>ことであった。この糸口により彼が当時褒め称えたイブセン（1828-1906）を見つけることができるだけでなく、彼の後の文芸活動と密接に関係するアンドレーエフ（1871-1919）などの人物をも見つけることができる。

## 六 「六号室」と『血笑記』及びその他

周樹人と〈狂人〉との接点の意義を見る上で、「六号室」と『血笑記』もまた避けて通れない存在である。これは、チェーホフ（1860-1904）とアンドレーエフに関連している。この二人の作家と魯迅との比較研究を行っている論文は多いが、特に多くが「六号室」『血笑記』と魯迅の「狂人日記」の関係について述べている。しかし、ここでは歴史の現場に立ち返るべきである。昇曙夢の回想によると、

チェーホフの伝来はゴーリキイより一两年後のことで、その紹介の第一人者は何と言っても瀬沼夏葉女史である。女史の訳に成る「写真帳」と「道迷ひ」とが何れも明治三十六年の「文藝倶楽部」に載ったのが最初であろう。……チェーホフの真珠の如き短篇の形式とその優れたユーモアとは、その当時から一部の作家の間に非常にもてはやされた<sup>(78)</sup>。

チェーホフが日本語に翻訳されたのは、ゴーリキイより遅かったが、翻訳された作品の数はゴーリキイより遥かに多く、しかも明治時期に紹介されたロシア作家としては最も多く、作品登場総数は104点に及び、明治時期のロシア文学の翻訳総数の凡そ15.6%を占めており、全て1903年から1912年の間に集中している。『魯迅全集』を紐解くと、チェーホフに触れている箇所は数十回を下らない、しかも彼にはチェーホフと関係した蔵書が大量にあり、彼はこの時期チェーホフと出会い決定的な関係を持っていたと見なすべきである。「六号室」には、二つの訳本があり、一つは馬場孤蝶（1869-1940）が「六号室」の表題で明治三十九（1906）年一月『文芸』一月号に発表し、もう一つは瀬沼夏葉（1875-1915）が同じく「六号室」の表題で同年四月『文芸界』四月号に発表したものである。明治四十一（1908）年十月にチェーホフ作品の単行本、瀬沼夏葉訳の『露国文豪 チェホフ傑作集』が出版され、その中に「六号室」も収録された<sup>(79)</sup>。

瀬沼夏葉は昇曙夢の師匠瀬沼恪三郎（1868-1945）の妻であり、昇曙夢にチェーホフを紹介した「第一人者」と称された。馬場孤蝶、小山内薫（1881-1928）、昇曙夢などは皆チェーホフの著名な訳者である。

「六号室」はほぼ同時に二種類の訳本が出現し、〈チェーホフ〉と〈病室の狂人〉をして無視できない存在にさせた。この二種類の訳本が出現して二年目に二葉亭四迷の日本語訳「狂人日記」と「二狂人」が現れたのも偶然ではないようで、その因縁も検討に値する。前述の1907年7月『帝國文學』で発表した「狂人論」ではこう述べている、「頃者我文壇は二葉亭主人の靈妙

なる訳筆によりて新たに露西亜種の三狂人を得」た、つまりこの種の狂人が文学作品の中で連続して登場する現象を的確に述べている。この前提の下、「六号室」を周樹人と〈狂人〉の一つの接点として考えているのは、道理にかなっていないであろうか。

更に一点、これまであまり提起されていなかったようだが、それはチェーホフの〈狂人〉の物語とゴーリキーの〈狂人〉の物語の同構造性である。このことについては、ゴーリキーの「二狂人」を閲読してはじめて意識した。まさに前に紹介した「二狂人」が述べているのは、一人が狂人の毒の下、気がふれさせられた物語である。この物語と〈六号室〉で発生した物語とは酷似している。〈六号室〉には五人の精神病患者が閉じ込められているが、院長がその中の貴族出身の病人に毒され、この病人の滔々とした演説には道理があると考えた。するとこの院長も精神病患者とされ〈六号室〉に押し込められそこで死んでしまった。二つの〈気がふれさせられた〉という構造は完全に同じである。チェーホフの「六号室」は1892年に発表され、ゴーリキーの「二狂人」は1895年に発表され、両者の間の師弟の友情と二つの作品の類似性から見れば、前者は果たして後者に対して影響があったのであろうか。これも興味深い問題である。

同様に、ゴーリキーと師弟の交わりがあるアンドレーエフにも同じような物語『血笑記』(1908、二葉亭四迷訳)がある。露日戦争に参加した〈私〉は、戦死者の血にまみれた笑い顔を見た後に、両足を失い、精神に異常を来たし、帰還後間もなく気が狂い死んでしまったが、〈私〉が戦場から持ち帰った狂気はそのまま書斎にこびりつき、戦場に行ったことがない弟さえも狂気に感染され気がふれた。二人の先輩と同じような〈気がふれさせられた〉という構造を呈していた。三つの作品は全て狂人の心理の変化を描写の対象としており、狂人のイメージの塑像の見本とすることができる。

アンドレーエフが日本で登場した時期は更に遅く、日露戦争終結後になって初めて翻訳された作品が出てきた。しかし集中的に出てきた頻度から言えば、アンドレーエフが明治期に翻訳された外国人作家の中のナンバーワンである。明治三十九年一月から明治四十五年十一月までの、わずか五年余りの間に翻訳されたアンドレーエフの作品は合計四十五篇ある<sup>(80)</sup>。これは周樹人が間もなく留学を終えようとしている時にアンドレーエフに注目し、翻訳しはじめたのと時期的に明らかに一致している。まさにこの背景が、彼にアンドレーエフに触れる環境と契機を創り出した。アンドレーエフの日本での受容とその同時期の〈魯迅〉との関係に関しては、既に素晴らしい先行研究があり<sup>(81)</sup>、筆者も非常にその認識の到達点に同意している。即ち「魯迅は日本のアンドレーエフ・ブームの渦中にいたというよりも、日本の文学者と競い合うように翻訳活動をしていたというのがより適切であろう」<sup>(82)</sup>。ここでは煩雑さを避けるため、本文の論旨に関連し、諸氏の研究では触れていないことのみを述べる。

アンドレーエフが日露戦争終結後の日本で熱心に読まれた重要な理由の一つは、彼をゴーリキーの後に続く、文学領域内の「通俗化されたニーチェ主義の先駆者」の代表と見なし、「わが

国でもある時期にはゴリキー以上に迎えられた」<sup>(83)</sup>からである。〈ニーチェ度〉から言えば、アンドレーエフの作品はゴリキーよりも更に濃厚である。これは恐らく周樹人が素早くアンドレーエフに接近した一つの重要な原因であろう。

当時翻訳された作品の中で、日本の文壇を最も震撼させたものは何と言っても『血笑記』であろう。二葉亭四迷がこの作品を『血笑記』と翻訳したのは、明治四十一年（1908）年一月一日雑誌『趣味』第三卷第一号で、掲載されたのは抄訳で「前篇、断片第一」の巻頭部分であった。同年七月七日、易風社から全訳単行本『新訳血笑記』が出版され、同年八月八日当該単行本が再販された。

戦争が〈狂人〉を製造することが世に出てきたことから言えば、『血笑記』がもたらした震撼は強烈で、当時の人間でさえも「恐らく文学あって以来この小説を以て嚆矢とするだろうと思う」と考えた<sup>(84)</sup>。この作品は戦争の狂気を日本社会にもたらし、文壇に吹き込み、模倣を引き起こした。四年後、内田魯庵（1868-1929）が「小説脚本を通じて観たる現代社会」という長文の執筆に着手した時、彼は「『太陽』の応募懸賞小説を調べた」ことを通じて、「狂人小説も多過ぎる」という事に気づき、しかも「たった一二行の文字がアンドレーエフの血笑記よりも戦争の惨禍を語ってるのに戦慄した」<sup>(85)</sup>。

「怖ろしいのか？」と私は又優しく言って見た。志願兵が何か言おうとして口元を動かした時、不思議な、奇怪な、何とも合点の行かぬ事が起こった。右の頬へふわりと生温い風が吹付けて、私はガクッとなった——唯其丈だったが、眼前には今迄蒼褪めた面の在った處に、何だかブツリと丈の蹙った、真紅な物が見えて、其處から鮮血が栓を抜いた壺の口からでも出るように、ドク、と流れている所は、拙い繪看板に能く有る図だ。で、そのブツリと切れた真紅な物から血がドク、と流れる處に、齒の無い顔でニタリと笑って赤い笑の名残が見える<sup>(86)</sup>。

これはアンドレーエフが描写した〈私〉の眼前で発生した一人の兵士が弾に当たった後に〈赤い笑〉が現れた情景である。

アンドレーエフの到来は確かに突然であり、上述のように、作品は瞬く間に数十篇にも翻訳され、当時の文壇は対応する暇あらずで、驚くと同時に、また対処に苦慮した。例えば、昇曙夢の一連の評論を読むと、明らかにこのロシア文学の紹介で知られる大家の、アンドレーエフと直面した時の躊躇と動揺を感じることができる<sup>(87)</sup>。また例えば、上田敏がアンドレーエフの中篇「思想」（Мысль、1902）をフランス語から「心」（1909）<sup>(88)</sup>と訳した時、篇名、アンドレーエフの翻訳、ロシア文学乃至全ての外国翻訳、誤訳、重訳、日本語の表現などの一連の問題をめぐって激しい論争を引き起こした<sup>(89)</sup>。まさに留学生生活を終えようとする周樹人は、このアンドレーエフの〈渦中〉とちょうど重なるようにして、〈渦中〉の波及と影響を受けると同時に、自らの判断と選択をした。その中には多くの探求と研究に値する問題がある。

例えば、ある学者が「狂人日記」発表前後の魯迅とその周辺の相互の状況を精査した際、『小

『説月報』1910年に発表した〈冷〉と署名した翻訳小説「心」を発見し、魯迅の「狂人日記」と対照して読んだのだが、これにより范伯群が中国近代文学の「狂人史」の中で、陳景韓「催眠術」を見つけたことに続く第二の例証を提供した<sup>(90)</sup>。読後、筆者に裨益するところが大きかった。「思想」はアンドレーエフの代表作であり、狂人の心の内を詳細に解剖した作品でもある。ここに至って、この作品の〈狂人の越境の旅〉の路線は既に明確に表れてきた。ロシア語「Мысль」→フランス語「L'epouvante」→日本語「心」→冷訳「心」→現在の中国語訳「思想」。もしアンドレーエフの「思想」を「狂人日記」と比較する項目を作るとすると、周樹人が魯迅となる過程において遭遇した一人の〈狂人〉であり、この連鎖上で明らかに彼と最も近かったのは上田敏の日本語訳本のはずである。筆者が、上田敏日訳本を底本とする「冷」の同名漢訳本と子細に照らし合わせてみたところ、全篇を通して誤訳、漏訳、翻訳者の創作としか見られない〈創訳〉(?)の現象があることに気が付かされた。昇曙夢は嘗てロシア語の原文を以て上田敏の訳本と対照し、その中の多くの些細な事（実際には、底本となったフランス語訳の問題も少なくなかった）に対して粗さがしをし、バッシングを大いに加えたが<sup>(91)</sup>、この標準に基づけば、〈冷〉の訳本は見るに堪えないものであったであろう。類似した例で言えば、「相當の手當（を貰って）」<sup>(92)</sup>を「相當的手段」<sup>(93)</sup>と訳すようなやり方は、明らかに「和文漢読法」の毒にあっている。この程度の日本語の力では、複雑な心理描写に遭遇すると訳し「漏」らすしかなく、文体の創造と作品としての「文勢」はもちろん期待できない。周樹人はこのような訳本を参照するかどうか、懐疑的である。しかし、「思想」という作品の、〈狂人の越境〉における位置と意味は、非常に検討に値する問題である。〈冷〉が「心」を翻訳したことを発見した意義は、「思想」の実質的な担い手である上田敏の日本語訳の存在に改めて気づかせたところにある。

比較してみると、〈狂人〉のイメージと出会った意義において、『血笑記』は更に強力な証左性を有していた。この作品は周樹人の前進の過程における一つの道標と見なすべきである。彼は留学を終える前に、この作品を翻訳することを計画し、予告までしたが、完成しなかった<sup>(94)</sup>。しかし彼とアンドレーエフの縁は既に深く結ばれていた。『域外小説集』に収録された周樹人の手による三篇の翻訳のうち、二篇はアンドレーエフのもの、つまり「謾」と「黙」であり、残りの一篇はアンドレーエフのものではないが、アンドレーエフの『血笑記』と似ているもの、即ちガルシン（1855-1888）の「四日間」である。もし「謾」と「黙」がドイツ語から転訳されていたら、周樹人が日本語訳の参照がない中で自主的な選択をしたというならば、「四日間」は明らかに二葉亭四迷の日本語訳を参照している<sup>(95)</sup>。ここで補う一点は、二葉亭四迷が「四日間」と訳したものには、二つの版本があり、一つ目の版本は明治三十七（1904）年七月の『新小説』で、〈苜心〉<sup>(96)</sup>と署名され、二つ目の版本は明治四十（1907）年十二月出版の『カルコ集』の中にある。既に紹介した「二狂人」もここに収録されている。

周作人は嘗て昇曙夢と二葉亭の翻訳に話が及んだ時にこう言った。「昇曙夢のものは誠実で、

二葉亭は自分が文人の為に、翻訳の芸術性は更に高く、これはつまり日本化したと言え、これによりその誠実性は更に劣り、我々のような材料を探している人間から見れば、ただ参考の資料として用いるだけで、訳述の根拠とするには都合が悪い<sup>(97)</sup>。もしも実際に例を探すとすれば、「四日間」第一版であろう。この〈翻訳〉は、場面が露土戦争から日清戦争に切り替わった朝鮮半島に設定され、主人公も日本兵に変わり、彼の眼中に出現したのは当然〈支那兵〉であった。第二版に及びこの状況はやっと改変された。周樹人が参考にしたのは第二版のはずである。しかし、周氏兄弟のアントレフや二葉亭訳に関する見方にも、昇曙夢の影響が多少あったことがうかがえる。

昇曙夢のアンドレーエフの文学には、「写実主義」、「象徴主義」、「神秘主義」の三つの傾向がある<sup>(98)</sup>という論断はもちろんのこと、二葉亭の翻訳に対する評価も、周作人が後に語ったのと瓜二つであった。

別に二葉亭氏の訳に就て同うの斯うのと云う訳ではなく、又批評する程の資格も私には無いが、たゞ二葉亭氏の訳は、余りにもアートが勝ち過ぎはしないかと思はれる。余りにも文学が上手で、原作者も及ばないくらいの巧みな筆を持って訳されるので、自然、それが二葉亭氏自身の文章となって、其間に幾らか原作の匂いや調子が、抜け気味があるように思われる<sup>(99)</sup>。

では、アンドレーエフとガルシンというこの線上で後のものを見ると、さらに多く見出させる。たとえば、『現代小説訳叢』（1921）に収録された前者の「暗い霧の中」、「本」、魯迅が東京の周作人に「くれぐれも忘れ」ずに必ず買って帰るように言った「七死刑囚物語」<sup>(100)</sup>及び兄弟二人が後絶えず話題にした後者の「紅花」等を見出させる。しかし、これは後の話である。いずれにしても、チャーホフ、ゴーリキー、アンドレーエフ、ガルシン等の筆の下での〈狂人〉は、こうして様々なテキストを通じて島国に越境し、〈文芸運動〉に従事していた周氏兄弟のもとに集まってきて、とくに周樹人の美的オプションとなったのである。これらの人物がこれまでの人物と最も異なるのは、その全てが内面の弁明という形で読者の前に現れていることである。しかも、いずれもある〈思想〉に執着して、全力を尽くしてそれから抜け出そうとしたが、結果として絡まれば絡まるほど抜けず、却って更に大きな〈思想〉の深淵に陥ったことである。それ以外にもう一つ重要なことがある、それはこれらの主人公たちが皆卑賤な人物であることである。彼らは「摩羅詩力説」のような〈精神界の戦士〉の〈狂人〉転化形態に属し、『『呐喊』・自序』のような「私は臂を振ってひとたび呼ばば、応えるもの雲のごとく集まる、という英雄では決してなかった」<sup>(101)</sup>という認識の到達点の途中に現れる。

## 七 〈狂人美〉の発見

先に提起したこれらの小説は、当然周樹人が当時読んでいた全てではない。彼の読書量は遙



かにこの数字を超えている。最近ある学者が興味深い研究を行い、「100篇余りの外国作品」がどれに当たるかを調査したところ、多くが符合していた<sup>(102)</sup>。

〈狂人〉の存在には提示が必要であり、〈狂人〉の意義には発見が必要である。これは狂人に関する〈評論〉が発揮する作用である。無極の「狂人論」は、「狂人日記」と「二狂人」とを通して〈狂人美〉を発見した。即ちまず狂人を審美層まで引き上げ、取り扱った。〈狂人〉の大量の登場と「世間の道德家、宗教家或いは道德家」からの非難に対して、評論家の長谷川天溪(1876-1940)が明治四十二(1909)年三月一日に「文学の狂的分子」という題で長篇の評論を発表したものが、真正面からの回答であろう。彼は文学とは狂人を描くもの、狂が無ければ文学無し、と考えた。「精神錯乱的性向を取り除いたならば、文学史という倉庫は、殆ど空しく成るであろう」<sup>(103)</sup>。彼は欧州と「我が国文学」の中の「狂的分子」現象を列挙した後にこう指摘した。「文学は、社会の反映である。去らば文学に狂的分子の多くなるを見ると共に、実際の社会にもまた狂的性向を有する人が漸次に多くなりつゝあることを承認せねばなるまい」<sup>(104)</sup>。続けて彼は狂性をもたらした原因とその種類及び古今の狂人に対する異なった審美観と描写方式を分析し、最後に〈狂人〉にみる「人生的意義」を肯定する。

世人動もすれば、狂的性質に、人生上の意義を発見するを出来ぬという。そは平凡生活を標準とするからのとだ。吾人は狂的分子其の物の上に、幾多の厳肅なる人生の意義あるを見るのである。

虚飾、偽善、衍誇、その他幾多の冠物をしているのが、此の人間である。然るに狂は其れ等の隠蔽物を取除いて、赤裸々の人生を示している。……如何なる狂人と雖も、現実的人生と離れて存在するものでない<sup>(105)</sup>。

恰も長谷川天溪と相呼応するように、昇曙夢がすぐに『二六新聞』上に「露国文学に於ける狂的分子」を発表し、三日間連載した。当該文は「露西亜文学は由来狂的分子に富んで居る」<sup>(106)</sup>から書き始め、ドストエフスキー、トルストイ、ゴーゴリ、ゴーリキー、ガルシア等の人が狂人の心理に対する描写を紹介し、最後に重点をアンドレーエフの「我が日記」に重点を置き、「極めて読みごたえのする心理小説である」<sup>(107)</sup>と称賛し、「ドストエフスキに於て凄い恐怖に打たれた者はアンドレーエフに於て新しい戦慄を感ずることが出来る」<sup>(108)</sup>とした。

昇曙夢の述べるところのロシア文学の〈狂人〉多産論は、明治期のロシア文学の翻訳の過程を振り返る一つの理論的要約と発見であり、ロシア文学のある種の特徴について再確認の意味もっている。実際、明治期のドストエフスキーの最も早い紹介者の一人の内田魯庵は、十五年前の明治二十七(1894)年に、彼が翻訳した「虐げられた人々」(1860)<sup>(109)</sup>の連載が始まった時既にドストエフスキーの作品中の〈狂気〉に注意していた。「ドストエフスキの狂人を写すや科学者の未だ観察し得ざる処を捕捉し来つて描写頗る精微を極むと。宜なる哉、渠が『罪與罰』は独り文学界に影響を與へしのみならず科学界に及ぼせし勢力も亦決して尋常にあらざりしは」<sup>(110)</sup>。魯迅は後にこう言っている。彼は「若かりし頃」ドストエフスキーの「貧し

き人々」を読み、「その暮年らしい寂しさに驚かされ、さらに「医学者はよくドストエフスキイの作品を病的に解釈する」「ルムプロゾ的」説明に注意し、同時にドストエフスキーが「精神病者」を作り出した意義も再認識した。「併し彼は精神病者としても露西亜ツアル時代の精神病者で、今でも若し彼に似よった重圧を受ければ受ける程彼の誇大を雑へた真実、冷いまでになた熱情、直に破裂しさうな忍従を、益々了解し、彼を愛する様になるのであろう」<sup>(111)</sup>。「貧しき人々」(1846)は最も早い、また明治期唯一の日本語訳でもある訳が『文芸倶楽部』の明治三十七(1904)年4月号上の「夏葉女史」の「貧しき少女」であった<sup>(112)</sup>。当該本は全訳ではなく、抄訳であり、作品中の女性主人公ワーレンカが男性主人公に渡した彼女自身の日記部分だけである。「若かりし頃」の周樹人が読んだものは恐らくこの訳であろう。しかし「貧しき少女」の登場人物は少し神経質ではあるが、〈狂気〉を帯びた作品ではないので、ドストエフスキーが周樹人にもたらした〈精神病〉の啓示は、恐らくその他の作品の中から探してくる必要があったであろう。

結局は、内田魯庵、無極、長谷川と昇曙夢等の評論が、当時の〈狂人〉認識論の到達点を代表している。彼らが先ず〈狂人〉を発見し、この基礎の上に〈狂人〉の特性と意義を解釈し、〈狂人〉の審美意識に関する自覚を呼び覚ましたことについて、その意義は極めて大きい。周樹人はこのスタートラインから前に進み続けた。しかし彼の仕事は、以前「摩羅詩力説」に書いたように、〈狂人〉に関する作品評論を書いたのではなく、自分が読んだことのある作品の中で、視線をあのかの〈狂気〉を帯びた篇目に向け、その中からいくつかの翻訳を試みることであった。「謔」「黙」「四日」「紅笑」は、周樹人の〈狂人〉の審美意識の確立を表しただけでなく、彼が〈狂人〉のイメージの塑像の文筆実践の過程に入りはじめたことも意味しており、日本語、ドイツ語乃至その他の言語の解説からはじめ、原作の言葉のイメージを十分に汲み取り、意味を頭の中で形にし、次いで再び自分の母語の中から最も適切な言葉と表現方法を選び出し、そのスタイル、その意味を新たに作り出し、それを完全に原語世界とは別個の世界に独立させた。これは既に遥かに「外国語を中国語にかえた」という言語層を超え、新たに別の文体と別の境界を創造した。昔、経典が西方から中華に持ち帰られた時、世間の人は佛はかのように言ったと考えていたが、実はそうではなく、佛が説いたものは「経典」に見られるような話しではなく、「経典」の中で説いていることの全ては漢訳されたものなのである。翻訳とは、言葉ではなく、境界であり、言葉が境界を作るのである。周樹人が翻訳を通じて完成させたことはこの種の〈境界〉の移植であった。これそのものは一種の創造である。胡適(1891-1962)はこう言う。『域外小説集』は「最も良い古文を用いて翻訳した」小説で、「古文翻訳小説に於いて最も素晴らしいものである」<sup>(113)</sup>。彼は周氏兄弟の日本における精神史について必ずしも詳細に理解してはいないが、作品に基づくこの評価は非常に適切である。翻訳と文体の再生を通じて、周樹人はアントレフヤガルシンなどの狂人心理描写についてさらに理解を深めただけでなく、狂人を描写する言語を掌握し、どのように描写するかを知った。

## 八 〈狂人〉の越境の到着

周樹人は日本での留学生生活を終えて、中国に帰国した九年後に〈魯迅〉のペンネームで「狂人日記」を発表した。これは中国の〈狂人〉の誕生を意味しており、作家魯迅の誕生をも意味している。人々はこの作品の異様なスタイル、異様な人物、異様な言葉と文体に対し驚き言葉もなく、「狂人日記」が中国文学に新たなページを開いた象徴的な事件となった。しかし、作者本人にとっては、これは自分がこれまで共に歩んできた〈狂人の越境〉の旅路の最終地にすぎなかった。

まず、本文で述べている範囲内では、もし1899年今野愚公がゴーゴリの「狂人日記」を翻訳したことが〈狂人〉が日本にやって来た越境の第一宿駅であるとするならば、1902年、松原二十三階堂が「狂人日記」を創作し、この越境した〈狂人〉が本土化し変身したことが第二宿駅であり、1906年チェーホフの「六号室」に二つの訳本が同時に出現し、翌年二葉亭四迷がゴーゴリの「狂人日記」を重訳し、同時にゴリキーの「二狂人」を世に問い、文芸界で〈狂人〉に対する重大な関心が凝集され、『帝國文學』上で無極の「狂人論」のような重要な評論が出現し、続けて大量の〈狂人彫像〉〈狂人音楽〉〈狂人の家〉〈狂人と文学〉の類の〈狂人〉の騒ぎが出現したこと等<sup>(114)</sup>、〈狂人〉の越境の第三宿駅であると言うことができる。さらに細分化して言うなら、これ以後アンドレーエフブーム——ゴリキーブームが続いて出現したので、その間隔は非常に不明瞭だが——と日本の文学青年が創作上前者の『血笑記』の人を「戦慄」させる模倣、及び著名な文芸評論家達の文学中の〈狂の分子〉に対する美学的解釈は、明治の日本、世間が既に〈狂人〉を許容し繁殖させる土壌条件を具備していたことを示しており、これは〈狂人〉の越境の第四宿駅と見ることができる。もちろん本論の〈越境〉とは、単に言語的に国境を越えることではなく、更に大きい意味で〈狂人〉のいる所の精神境界及びその変遷を指す。文芸創作の準備から言えば、周樹人は完全にこの〈狂人〉の越境の過程を伴にし、自身がそれに深く染まってしまっただけでなく、作品の閲読体験と批評の訓練を経て、更に翻訳の操作により〈狂人〉の〈境界〉の移植を実現した。周樹人が『域外小説集』に留めた三篇の翻訳は、〈狂人〉に対する認識が自覚的な高度までに到達した産物であり、〈狂人〉を内面化させ改めて〈狂人の境〉を製造する作業を書き記した記録であった。これは〈狂人〉が越境し到達した第五宿駅で、〈狂人〉のイメージは翻訳を通じて、周樹人の精神界にそびえ立ったと言うことができる。これは〈狂人〉が中国に越境した始まりであった。周樹人は〈彼〉の水先案内人で、いや、〈彼〉は恰も「影の告別」の〈影〉<sup>(115)</sup>のようで、その背後にピタリとくっつき、離れることがない。これほどまでに「狂人」と付き合った者は、当時も今も中国で二人目を見つけることはできない。そのために、魯迅は人々が彼の「狂人日記」を読んで受けた衝撃を話す時、本文の巻頭で引用したあの言葉を言う資格がある。これは「従来ヨーロッパ大陸文学を紹介することを怠ったゆえんである」と。

次に、ここで言う「ヨーロッパの大陸文学」とは、広い意味で、ヨーロッパ、アメリカ、ロシア及び東ヨーロッパを含むが、〈狂人〉の作品について言えば、その主な担い手はやはりロシア文学である。ロシア文学——もう少し正確に言うと明治日本に伝わったロシア文学が周樹人に〈狂人〉に触れるきっかけを創り出した。ロシア文学の翻訳紹介は明治期の後半二十年に集中しており、合計六百五十篇以上のロシア文学作品が日本語に翻訳された。訳者の多さ、種類の多さ、規模の大きさは全て遙かに今の人々の想像を超えており、まさに周樹人の閲読範囲の広さが遠く人々の予想を超えたのと同じである。一言付け加えれば、一昨年周樹人の閲読史に関して二つの重要な発見があり、一つ目は「科学史教篇」の完全な材源が見つかったこと<sup>(116)</sup>、もう一つは「摩羅詩力説」の最後に出てくる〈コロレンコ〉<sup>(117)</sup>である。これは周樹人がどのようなものを読んでいたのかということが、引き続き課題になることを意味する。しかし周樹人が残した「あの時日本でロシア文学を翻訳することは発達していなかった」<sup>(118)</sup>と言う印象は修正できるようになった。彼と兄とのロシア文学に対する接触と印象は同じではなかった。周樹人がロシア文学と結んだ文字の縁は、ほとんど彼の留学当時からはじまっており、後の話ではない。彼のその後のソ連文芸との関係も、この延長線上にあるのは言を俟たない。ロシア文学が大量に翻訳、紹介されたのは、当然日露戦争の背景と切り離すことはできない、ロシアのインテリが専制に反抗し、大胆に人間性の醜悪と善良を解剖し、様々な方法で精神抗争を展開したことは、疑いもなく日本のインテリ界の共鳴を引き起こした。後者は周樹人が留学したあの時期において、正に〈ニーチェ〉を旗頭とし、国家主義の圧力の下で〈自我〉空間を確保しようとしていた。これにより〈個人〉〈個性〉〈精神〉〈心霊〉〈超人〉〈天才〉〈詩人〉〈哲人〉〈精神界の戦士〉〈真の人〉を闘争の武器とした時、敵国のロシア文学を自らの最大の援軍とした。〈国家〉と〈詩人〉という対蹠において、彼らは〈詩人〉を選んだ、たとえそれが敵国の〈詩人〉であってもである。たとえば、「個としての人間の確立を主張した言説のなかで最も魯迅の文章と親近性が観られる」<sup>(119)</sup>ものとして指摘された野の人の「国家と詩人」は、その代表であらう。

人叫むで曰く「あゝ今の世に、国家の大理想を歌ひ、国家の膨張を讃美する詩人なきか」と吾人敢て曰はむ、所謂国家なるものに、豈理想あらむや。彼はたゞ、地と人と秩序とを有するのみ。豈何処にか理想あらむや。もし国家に理想なるものあらば、これ国家の産みたるものならで、実に大なる天才の創りたるものならむのみ。

……（中略）……

吾人は国家の膨張と繁栄とを願わず。將た其破壊と滅亡とは吾人の恐るゝ所に非ず。希臘は亡びたり、さらどホメールは今に活きたり。ダンテの国は今は無し。されど「神曲」は尚活きぬ。吾人は唯に、大いなる理想を告ぐるべき天才の永しへに世に在らむことを望む。国家は初めて天才に依りて活く。其最大なる光榮と威嚴とは実に天才に外ならず。…

（中略）…天才の大なる理想とは何ぞや。吾人心霊の力を教え、人格を強め、向上的個性

活動の精神を伝えて、永遠の光明に導くもの即ち是なり。

…… (中略) ……

思ふに偉大なる国家は常に自らを鞭打ち、自らを戒むる声有す。専制にして非自由なる露国が此の如く自由と個人主義唱道する詩人天才を出すはこれ彌々露国の偉大なるを示して余りあり。詩人天才の声はこれ人生最高の心霊の活動也。心霊の活動する処其地其人必や偉大必や強し。露国は真に偉大なり……。(筆者注、強調符号は原文のまま)

…… (中略) ……

国家は方便なり「人」は理想なり。「人」なき国家は無意味なり。故に靈なき国、人の声なき国は吾人一日も其存在を徳とせず。自世界の勢力と称して、虚栄讚美に酔ふの人は世に多し。しかも憫れむべき国民は遂に人生の福音を聞く能はざるか。嗚呼若し吾人長く我國語によりて「人」の意義を知ること能はずむは、吾人は寧ろ亡国の民となり、東海を踏みて、漂浪の人とならむのみ<sup>(120)</sup>。

これは〈立人〉(人間を確立)<sup>(121)</sup>している周樹人にとって、まさに「撥をもって弾ずるやその心弦はたちどころに響き」というところの「人の心を搔き乱す」<sup>(122)</sup>声である。〈ニーチェ〉と言うフィルターを通して次々とやって来るロシア文学が彼と意気投合するものとなった。もし彼の「摩羅詩力説」の文章を借り、〈詩人〉〈天才〉〈哲人〉〈精神界の戦士〉に関する自我精神の塑像を完成し、彼の後の〈狂人〉の塑像の為に十分な精神的内質を準備したとするなら、彼がロシア文学の中でまず学んだものは精神解剖と語り方の実験であった。つまり、閲読と翻訳を通じて、彼は〈狂人〉が現実を観察した視点とこの種の視点の表現方法を体験し学習するに至ったことである。角度を変えればこうも言えるだろう。ただ「摩羅詩力説」と他のいくつかの同時期に書かれた論文によってだけでは、「狂人日記」を説明するには足りない。それはその間に参照と実践過程についての説明が欠けているからである。本論で述べた周樹人と密接に交わられる〈狂人の越境〉の道程は、まさにこのような過程の補述である。

では、〈狂人〉越境の旅の第五宿駅の後、「狂人日記」に至るまで周樹人に付き従っていた〈狂人〉は果たして〈宿駅〉と呼ぶことのできる足跡を残しているのだろうか。周樹人がこの時期に残した文字から言えば、ただ1913年四月二十五日に『小説月報』四巻一号の「懷旧」が注意に値するのみである。これは私塾で勉強している「九歳」の子供である〈予〉の視点により表された物語である。〈予〉は遊んでばかりで勉強をせず、彼に「論語」を教える「秃先生」を嫌っていた。「四十余年前」の「長毛」が彼の周りの大人たちに恐怖の記憶を残し、「長毛」が来たと聞くや否や、人々は心配で、逃げる準備をし、拳句の果てに誤報と分かったが、〈予〉は(秃先生)等の狼狽ぶりを心ゆくまで見た。筆者の検証の結果、「懷旧」と「狂人日記」はある種の関連を構成しているというよりも、この後に創作した作品との関連性が大きいというべきで、その中の多くの要素、例えば私塾、郷紳、長毛、家政婦、狼狽等後に全て以下の作品に分散していった。「阿長と『山海経』」「五猖会」「百草園から三味書屋へ」「『二十四孝



凶』」「阿Q正伝」である。最後の一篇（〈革命党〉の噂がもたらした恐怖と狼狽が、完全に「懐旧」の人心の恐れとして複製している）を除いて、その他の篇は全て『朝花夕拾』に収まり、これにより「懐旧」が「旧事重提」（「朝花夕拾」の前身）の〈懐旧〉系列に属して、〈狂人〉系列ではないことがわかる。この作品は周樹人がアンドレーエフとガルシンを翻訳した後の初めての創作の試みである。内容に関して言えば、彼は本国のことを思い出すことを通じて、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、チェーホフの小説に似たようなことを書こうとしたが、当時の彼について言えば、これらは潜在的な課題であり、それで少し書いてはすぐに止めてしまい、二度と人に見せなかった。——この作品は魯迅の生前は未収録で——その時の彼はまだ昨日の〈摩羅詩人〉が彼にもたらした「血と鉄があり、焰と毒があり、再起と復讐があった」「血なまぐさい歌声」<sup>(123)</sup>に浸り、さらに脱出できない「アンドレーエフ式の暗鬱」<sup>(124)</sup>に包まれ、「寂寞」と「鉄の部屋」に窒息して息ができなくなった時、蓄積してきた生命の意志のほとばしりは、ただ〈狂人〉の叫びでしかなかった。〈狂人の越境〉の到着点から振り返ると、1918年の周樹人は、何も書かないか、書くとしても、「狂人日記」しか書けなかったであろう。

〔注〕

- (1) 李冬木「狂人の誕生：明治期の〈狂人〉言説と魯迅の「狂人日記」、佛教大学『文学部論集』103号、2019年3月。
- (2) 同上、佛教大学『文学部論集』103号、12-14頁参照。
- (3) 魯迅『『中国新文学大系』・「小説二集」序』、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、平成四年四月第三刷、第273頁。以下の魯迅の引用は同全集よりである。
- (4) 周遐寿『呐喊衍義・七 礼教吃人』、周作人著、止庵校訂『魯迅小説里的人物（周作人自篇文集）』、河北教育出版社、2002年、第18頁。
- (5) 竹内実「魯迅とゴーゴリ 二つの〈狂人日記〉」、初出『世界文学』、1966年3月、『魯迅周辺』に収める、東京：畑田書店、1981年、第219-237頁。
- (6) 〔捷〕馬里安・高利ク（Marián Gálik）作、伍曉明訳「魯迅的〈呐喊〉與迦尔洵、安特萊夫和尼采的創造性對抗」、北京：中国社会科学院文学研究所編『魯迅研究動態』、1989年第1、2期。
- (7) 宋炳輝「從中俄文学交往看魯迅「狂人日記」的現代意義——兼與果戈理同名小説比較」、上海：上海外国語大学、中国比較文学学会『中国比較文学』季刊、2014年第4期、第133頁。
- (8) この方面では、Marián Gálikが素晴らしいスタートを切った。彼は原著の閲読を通じて、ガルシン「四日」「紅花」とアンドレーエフの「嘘」「沈黙』『我が記録』等の資料と魯迅の「狂人日記」を比較し後者が成立した原因を暗示する資料を提供し、後、中国語訳で展開したガルシン、アンドレーエフ等により「狂人日記」と比較した。前出Marián Gálikの論文を参照。
- (9) 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——紹介魯迅篇定的〈小説訳叢〉」、魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅蔵書研究』、中国文聯出版公司、1991年版、第299-300頁。
- (10) 例えば、姚錫佩、陳漱渝らの文章以外に、『小説訳叢』に関する内容とスクラップの来源は、竹内良雄を参照：「魯迅的〈小説訳叢〉及其他」、王惠敏訳、『魯迅研究月刊』、1995年第7期。
- (11) 魯迅『『死せる魂』・「百図」まえがき』注釈を参照、『魯迅全集』第8巻、第496-498頁。
- (12) 当該統計は、「明治翻訳文学年表 ゴーゴリ篇（Николай васьильевич гоголь、1809-1852）」、川戸道昭、榎原貴教篇集：『明治翻訳文学全集37 ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、による。
- (13) 龍島亘『ロシア文学翻訳者列伝』、東京：東洋書店、2012年3月、第162頁。当該書は『第一高等中学校校校友會雑誌』の出版時期を「明治二十六年三月」と表記しているが、前出の『明治翻

訳文学年表『ゴゴリ篇』に基づく、明治二十六年一月となる。

- (14) 作者未署名、「非凡非常なる露國文学の顕象」、『裏錦』第一巻第三号、明治二十六年一月、第48頁。
- (15) 西海枝静「露國文豪ゴゴリの傑作レウヰゾルを読む」、『江湖文学』、明治二十九年十一月。
- (16) 西海枝静「露國文学と農民」、『帝國文學』第三巻第十一号、明治三十年十一月十日。第76頁。
- (17) 桑原謙蔵「露西亜最近文学の評論」、『早稲田文學』第三十一、三十三、三十四、三十六、四十一号、それぞれ明治二十六年一月、二月(33、34号)、三月、六月。
- (18) 前出薮島亘『ロシア文学翻訳者列伝』、第223頁参照。
- (19) 昇曙夢『露國文豪ゴゴリ』、東京：春陽堂、明治三十七年六月。
- (20) 魯迅『『熱風』・六十五 暴君的臣民』、『魯迅全集』第1巻、第448頁。
- (21) 前出『明治翻訳文学年表 ゴゴリ篇』に依って以下の事が分かる、昇曙夢が『露國文豪ゴゴリ』を出版するまで、上田敏、徳富蘆花、二葉亭四迷、今野愚公はそれぞれ一篇を翻訳し、残月庵主人は二篇翻訳した。
- (22) 昇曙夢「自序」、前出『露國文豪ゴゴリ』、第1-3頁。
- (23) 昇曙夢「緒論」、同上『露國文豪ゴゴリ』、第2-3頁。
- (24) 詳細な内容は以下を参照：昇曙夢「十八(結論)文學者としてのゴゴリ」、同上、第195-206頁。
- (25) 昇曙夢「自序」、同上、第4頁。
- (26) 昇曙夢「五 ゴゴリの創作(其二)」、同上、第52-54頁。
- (27) 昇曙夢「露文学の過去」、東京：『太陽』第十一巻第十一号、明治三十八年八月、第128頁。
- (28) 「露國文学の写実主義」、同上、第220頁。
- (29) 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年。当該書「序」と第三章参照。
- (30) 昇曙夢『露西亜文学研究』、東京：隆文館、明治四十年十二月。
- (31) 昇曙夢「露國の自然主義」、『早稲田文學(第二次)』第二十九号、明治四十一年四月一日。
- (32) 昇曙夢「露國写実主義の創始者(ゴゴリの誕辰百回紀に際して)」、『太陽』第十五巻第六号、明治四十二年五月一日。第124-129頁参照。
- (33) エン・ウェ・ゴゴリ作、二葉亭四迷譯：「肖像画(一・二・三)」、『太陽』第三巻第二、三、四号、それぞれ明治三十年一月二十日、二月五日、二月二十日。
- (34) 秦野一宏「日本におけるゴゴリ：ナウカ版全集(昭9)の出版まで」、『ロシア語ロシア文学研究』15号、日本ロシア文学会、1983年9月15日。
- (35) 秦野一宏「ゴゴリの二葉亭訳をめぐって」、『ロシア語ロシア文学研究』26号、日本ロシア文学会、1994年10月1日。
- (36) 日本近代文学館・小田切進篇『日本近代文学大事典』第三巻、東京：講談社、昭和五十二年、第249頁。
- (37) 松原岩五郎「二葉先生追想録」、坪内逍遙・内田魯庵篇輯『二葉亭四迷』、易風社、明治四十二年、上ノ一四。
- (38) 前出『日本近代文学大事典』第五巻、第110頁。
- (39) 松原二十三階堂「狂人日記」、『文藝俱樂部』第八巻第四号、明治三十五年三月一日、第129-147頁。
- (40) 叙述の利便性の為に、特別な説明がなければ、本文の作品の人物の翻訳名は現行の訳名を用いる。
- (41) 二十三階堂「ドストエフスキの罪書」、『國會新聞』、明治二十五年五月二十七日。
- (42) 前出中村光夫『二葉亭四迷伝 ある先駆者の生涯』、第240頁。
- (43) この時期の二葉亭四迷に関しては、前出中村光夫『二葉亭四迷伝 ある先駆者の生涯』「ハルビンから北京へ」の一章を参照。

- (44) 嵯峨のや主人訳「東方物語」、『文藝倶楽部』第十一卷第十三号、明治三十八年十月。西本翠蔭譯「外套」、『文藝倶楽部』第十五卷第八号、明治四十二年六月。
- (45) 前出松原二十三階堂「狂人日記」、『文藝倶楽部』第八卷第四号、第129頁
- (46) 魯迅『墳』・摩羅詩力説、『魯迅全集』第1巻、第98頁。当該文は1907年に発表され、雑誌『河南』第二、三号に連載され、〈令飛〉と署名された。
- (47) 前出魯迅『墳』・「摩羅詩力説」、第129頁。
- (48) 八杉貞利『詩宗プーシキン』、東京：時代思潮社、明治三十九（1906）年。前出北岡正子『魯迅文学の淵源を探る「摩羅詩力説」材源考』、序と第3章参照。
- (49) P. Kropotkin *Russian Literature (Ideals and Realities)* London. Duckworth & Co. 1905. 前出北岡正子『魯迅文学の淵源を探る「摩羅詩力説」材源考』、序と第3章参照。
- (50) 昇曙夢「レルモントフの遺墨」、『太陽』第十二卷第十二号、明治三十九（1906）年六月一日。『露西亞文学研究』に収録、隆文館、明治四十（1907）年。
- (51) 前出昇曙夢『露西亞文学研究』の中の「露國詩人と其詩 六 レルモントフ」参照。
- (52) 北岡正子「第3章 バイロニズムのロシヤへの波動 プーシキンとレルモントフの對立する詩精神」、前出『魯迅文学の淵源を探る—「摩羅詩力説」材料考』、第215-355頁参照。
- (53) 『文学評論』2018年第5期〈「狂人日記」発表100周年紀念專輯〉内の二篇の論文を参照：李冬木「“狂人”之誕生——明治時代的“狂人”言説與魯迅的「狂人日記」」、汪衛東「「狂人日記」影響源新考」。
- (54) 例えば、日本近代文学館・小田切進篇『日本近代文学大事典』第一～六卷、東京：講談社、昭和五十三（1978）年。
- (55) 「解説」、河野與一、中村光夫篇集：『二葉亭四迷全集』第四卷、第439頁、岩波書店、昭和三十九年（1964）十二月、第439頁。前出李冬木「狂人の誕生」参照。
- (56) 「二狂人（口絵）岡田三郎助」、ゴーリキイ作、二葉一亭主人訳「二狂人」、『新小説』第十二年第三卷、明治四十（1907）年三月一日。
- (57) 昇曙夢訳「ゴーリキイの人生観真髓」、『新小説』第十二年第三卷、第45-50頁。
- (58) 二葉亭主人訳『カルコ集』、東京：春陽堂刊、明治四十一年（1908）一月一日。4篇が収録されている：「ふさぎの虫」「二狂人」「四日間」「露助の妻」。
- (59) 前出『新小説』第十二年第三卷、第39頁。
- (60) 無極「狂人論」、『帝國文學』、第十三卷第十七号、明治四十年七月十日、第140-141頁。
- (61) 周作人「關於魯迅之二」、止庵校訂『周作人自篇文集・魯迅的青年時代』、石家庄：河北教育出版社、2001年、第129頁。また、明治期に周作人が述べたゴーリキイの『母親』にも各種訳本があったという状況は未だ確認されていない。
- (62) 姚錫佩「魯迅眼中的高尔基」、前出『魯迅藏書研究』、第150-151頁。
- (63) 前出姚錫佩「魯迅眼中的高尔基」、前出『魯迅藏書研究』、第152頁。
- (64) 当該統計は、「明治翻譯文学年表 ゴーリキイ篇（Максим Горький、1868-1935）」、川戸道昭、榊原貴教篇集『明治翻譯文学全集〈新聞雑誌篇〉44 ゴーリキイ集』、東京：大空社、2000年10月、による。
- (65) 昇曙夢「ロシア文学の傳來と影響」、ソヴェト研究者協會文学部會著『ロシア文學研究』第2集、東京：新星社、1947年、第243頁。
- (66) 前出昇曙夢「ロシア文学の傳來と影響」、第245頁。
- (67) 昇曙夢「ゴーリキイの傑作と其の世界観」、『早稲田文學』（第二次）第十号、明治三十九年十月一日。
- (68) 前出昇曙夢「ゴーリキイの傑作と其の世界観」、第63頁。
- (69) この問題に関しては以下を参照：李冬木「留学生周樹人周辺の〈尼采〉及其周辺」、張釗貽釗主篇『尼采與華文文学論集』、シンガポール：八方文華創作室、2013年、第87-126頁。山东省社会科学院主办『東岳論叢』、2014年第3期。

- (70) 昇曙夢は嘗て長文を書いて「高山樗牛博士」を追悼したが、そこに彼と樗牛の精神的関係を見ることが出来る。昇曙夢「樗牛高山博士を悼む」、『使命』、明治三十六(1903)年二月号。
- (71) 前出「二狂人」、『カルコ集』、第197頁。
- (72) 前出「二狂人」、『カルコ集』、第200頁-201頁。
- (73) 前出「二狂人」、『カルコ集』、第228頁。
- (74) 齋藤信策「狂者の教」、『帝國文學』第九卷第七号、明治三十六年七月十日、第118頁。
- (75) 前出『魯迅全集』第1巻、第122頁。
- (76) 魯迅『『墳』・文化偏至論』、『魯迅全集』第1巻、第83頁。
- (77) 前出魯迅「文化偏至論」、第76頁。
- (78) 前出昇曙夢「ロシア文学の傳來と影響」、第245-247頁。
- (79) 瀬沼夏葉訳『露國文豪 チエホフ傑作集』、獅子吼書房、明治四十一年十月。
- (80) 当該統計は、塚原孝篇「アンドレーエフ翻訳作品目録」、川戸道昭、中林良雄、榊原貴教編集『明治翻訳文学全集(翻訳家篇)17 上田敏集』、大空社、2003年7月、による。
- (81) 例えば、大谷深(1963)、清水茂(1972)、川崎浹(1978)、藤井省三(1985)、和田芳英(2001)、塚原孝(2003、2004)、安本隆子(2008)、梁艶(2013)等。
- (82) 藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』、東京：平凡社、1985年、第144頁。
- (83) 川崎浹「日本近代文学とアドレーエフ」、日本近代文学館・小田切進篇『日本近代文学大事典』第一～六巻、東京：講談社、昭和五十三(1978)年、IV第322頁。
- (84) 『『血笑記』の反響』、『二葉亭四迷全集』第4巻、第436頁。
- (85) 内田魯庵「小説脚本を通じて観たる現代社会」、『太陽』第十七巻第三号、明治四十四(1911)年二月十五日、第110頁。
- (86) アンドレーエフ作、二葉亭訳『新譯血笑記』、東京：易風社、明治四十一(1908)年、第27頁。
- (87) 例えば、「露國新進作家に通じたる新傾向」(1909.6)、「露國新作家自叙伝」(1909.8)、「露國文壇消息」(1909.8)等。
- (88) アンドレーエフ作、上田敏訳『心』、東京：春陽堂、明治四十二(1909)年六月。
- (89) この論争に関しては、前出藪島亘『ロシア文学翻訳者列伝』と塚原孝「上田敏とアドレーエフ」(前出『明治翻訳文学全集(翻訳家篇)17 上田敏集』に収録)を参照。
- (90) 張麗華「文類的越界旅行——以魯迅「狂人日記」與安特来夫「心」的対読为中心」、『中国學術』第31輯、2012年9月。論文を贈っていただいた北京大学の張麗華先生に改めて感謝申し上げます。
- (91) 前出藪島亘、塚原孝を参照。
- (92) 前出アンドレーエフ作、上田敏訳『心』、第159頁。
- (93) 俄国痕苔原著、冷訳『心』、『小説時報』一卷六期、第37頁。
- (94) 魯迅『『集外集』・紅笑についてについて』、『魯迅全集』第9巻、第159頁。
- (95) この三篇の作品については、谷行博「謾・黙・四日——魯迅初期翻訳の諸相——(上)(下)」、『大阪経大論集』第132、135号、昭和五十四年十一月、五十五年五月参照。
- (96) この版本は佛教大学博士課程の張宇飛君が私に提供したものである。
- (97) 周作人『知堂回想録・第二巻・「七九 学俄文」』、石家庄：河北教育出版社、2001年、第249-250頁。
- (98) 前出『露西亞文学研究』、第300頁。
- (99) 昇曙夢「露西亞文学に学ぶべき点」、『新潮』第九巻第四号、明治四十一年十月。
- (100) 魯迅「一九〇四—一九〇九 周作人宛」、『魯迅全集』第14巻、第80頁。
- (101) 『魯迅全集』、第2巻、第12頁。
- (102) 姜異新「百来篇外国作品尋繹——留日生周树人文学閱讀視域下的“文之覚”(上、下)」、『魯迅研究月刊』、2020年第1期、第2期。
- (103) 長谷川天溪「文学の狂的分子」、『太陽』第十五巻第四号、明治四十二年三月一日、第153頁。

- (104) 前出長谷川天溪「文学の狂的分子」、第155頁。
- (105) 前出長谷川天溪「文学の狂的分子」、第180頁。
- (106) 昇曙夢「露國文学に於ける狂的分子」(上)、『二六新聞』、明治四十二年八月五日。
- (107) 昇曙夢「露國文学に於ける狂的分子」(中)、『二六新聞』、明治四十二年八月六日。
- (108) 昇曙夢「露國文学に於ける狂的分子」(下)、『二六新聞』、明治四十二年八月七日。
- (109) 不知庵主人訳「ドストエーフスキイの『損辱』」、『国民之友』、明治二十七年五月～明治二十八年六月連載。
- (110) 不知庵主人訳「ドストエーフスキイの『損辱』」前言、『国民之友』第十四卷、第二百二十七号、川戸道昭、榊原貴教篇集『明治翻訳文学全集(新聞雑誌篇)45ドストエーフスキー集』、東京：大空社、1998年5月収録。
- (111) 魯迅『『且介亭雜文二集』・ドストエーフスキイの「」』、『魯迅全集』第8巻、第457-459頁。
- (112) ドストエーフスキイ作、夏葉女史訳『貧しき少女』、『文藝俱樂部』明治三十七年四月号、前出『明治翻訳文学全集(新聞雑誌篇)45ドストエーフスキー集』収録。
- (113) 胡適1958年5月4日講演「中國文藝復興運動」、『胡適時論集』第八卷、2018年、第30頁。
- (114) 前出拙文「狂人の誕生：明治期の〈狂人〉言説と魯迅の「狂人日記」」を参照。
- (115) 魯迅『『野草』・影の告別』、『魯迅全集』第3巻、第18-19頁参照。
- (116) 宋声泉「『科学史教篇』藍本考略」、北京：《中国現代文学研究叢刊》、2019年1期参照。
- (117) 張宇飛「一個新材源的發見——關於魯迅「摩羅詩力説」中的「凱羅連珂」」、北京：『魯迅研究月刊』2020年第1期参照。
- (118) 前出周作人「關於魯迅之二」、第128頁。
- (119) 中島長文『ふくろうの聲 魯迅の近代』、東京：平凡社、2001年、第20頁。
- (120) 齋藤野の人「國家と詩人」、『帝國文學』第九卷第六号、明治三十六(1903)年六月。野のひと魯迅の關係について、以下の文献を参照した。伊藤虎丸、松永正義「明治三〇年代文学と魯迅：ナショナリズムをめぐる」(『日本文学』29巻6号、1980)、伊藤虎丸『魯迅と日本人：アジアの近代と「個」の思想』(朝日新聞社、1983)、清水賢一郎「国家と詩人：魯迅と明治のイプセン」(『東洋文化』74号、東京大学東洋文化研究所、1994)、中島長文『ふくろうの聲：魯迅の近代』(平凡社、2001)。
- (121) 前出魯迅『墳・「文化偏至論」』、第85頁。
- (122) 前出魯迅『墳・「摩羅詩力説」』、第101頁。
- (123) 魯迅『『野草』・希望』、『魯迅全集』第3巻、第30頁。
- (124) 前出魯迅『『中国新文学大系』・「小説二集」序』、第273頁。

#### 〔付記〕

本論は2020年1月7日中国社会科学院文学研究所の招請で同題の報告を行った上で完成したものであり、佛教大学2019年度海外研修の成果の一つでもある。文学所及び佛教大学の関係各位に衷心より感謝申し上げる。

(り) とうぼく 中国学科)

2020年11月16日受理